(C)新潟日報社

社説

世界遺産登録

佐渡の個性総体的に生かせ

佐渡金銀山の世界遺産登録を目指す県民会議が発足、広範な県民による登録実現への運動が本格化した。

鉱山に関わる遺産にとどまらず、佐渡に育まれた独自の文化、離島としての地域性が持つ価値全体を見直し、評価することが大切だ。

泉田裕彦知事や福田勝之・県商工会議所連合会代表ら10人が共同代表を務め、発足段階で789の企業・団体が参加した。

県民会議の設置は、佐渡島内に偏りがちだった運動を全県的に広げ、強化しようというものだ。

講演会などを通じ、佐渡金銀山の持つ価値を周知する一方、内外への広報活動、史跡の保全などを通じ、過去からの遺産を未来への資産として明確に位置づけることによって、取り組みを新たな地域づくりにつなぐことが期待できる。そのような活動のあり方が「登録」という結果にも結びつくはずだ。

「佐渡金銀山世界遺産登録推進県民会議」は、県内の産学官が連携し登録へ向けた活動を展開する。

2017年の登録を目指す。

佐渡金銀山は既に2010年に世界遺産の暫定リストに記載されている。本年度中に国連教育科学文化機関（ユネスコ）に提出する推薦書案がまとめられる予定だ。

ユネスコは登録にあたっての評価基準として「文化的伝統または文明の存在を伝承する無二の存在か」「歴史上の重要な建築物、科学技術の顕著な見本か」などを挙げている。

推薦書では、400年以上の歴史があり、鉱山文化や人々の営みが町並みなどから分かる。採掘から精練までの技術体系が自立的に発展したことが分かり、東アジアでは例がない−ことなどを特筆すべき価値として掲げる方針だ。

国家経済を支えたわが国を代表する鉱山の遺跡や、それにまつわる文化は世界に誇れるものだ。

保存や整備の重要性は言うまでもない。世界遺産の「金看板」が得られれば、内外の関心を高め観光客の誘致にも大きな力を持つだろう。

だが、それだけでは物足りない。金銀山が持った極めて強い吸引力。隔てるのではなく、遠い地域と地域をつなぐ存在としての海。それらが重なって育んできた佐渡文化総体を浮き彫りにし、未来への可能性として提示していきたい。

能や鬼太鼓、おけさなど芸能関連だけではない。佐渡には金銀山全盛時、時代の最先端を行く技術や文化も各地から持ち込まれた。日本の南北の境界としての豊かな自然相も、そういう資産に含まれるだろう。

離島でありながら豊かな交流に支えられた「開かれた独立性」と言えるものが佐渡文化の特徴だ。それを生かす地域づくりは、グローバル化の中で個性を生かす道を模索する他地域のモデルにもなるはずだ。

県民会議発足の式典で候補地の調査などにあたる国際記念物遺跡会議（イコモス）の国内委員会委員長は「末永く魅力的な場所として、住む人にも来る人にもよい場所にする努力が必要」と語った。その言葉を、重く受け止めたい。

2014.2.17